



中村俊定文庫  
文庫 18  
273





日月を一切けりあへり人の不死  
を思ふれども時を待つる亦日月も  
人と同しこゝに色慾を断りて  
より日月を十周也圓くにこそ能く  
悟るはく遊福の行もむよとをきと  
手向すらくある中世に  
志りへま在てむすあかきさす  
かけは行路や日向のては



めくせと、陸奥のりよ、日よて細布  
のむねさひ合はぬ海を詠めしとる  
折りし折紙志る夢を松一海  
象滔を詠くけりて信濃よ折りしれ  
許りける物写しあつめありとて便  
あしりぬを川ありと見えぬ奥  
川御の時のたぐはぬ地は細布文章よ  
あしりぬる吹跡よといまゝ世よみむら

木の物なりそあんな奈の火を道れれは  
の誓よりあつらふ地獄す時を何處  
今年遠るよあつらふを坊するも  
あつらふやうにたれよあつらふ刻  
あつらふ永く風雅の至寶あり先  
追福作善の宿身一ありんか思ふ  
あつらふ細布と加へる信濃の真加  
と有難く題号をり作意其の始



つらよゆこゝしと拾遺とゆんで  
善く所見をゆすおあり

東郊深川隠士

柴立園西青

寛保癸亥初冬

動物

一 け集のくくめに去の暮二句あり  
くち候まてくねと出とくむじん海の  
粉骨とあふ

一 奥の細道よここの家上川あり  
あるお少くよ遠いつり是は娘の作  
あてあそびあつる物あらん  
茶梅味ふを



一 此亦公奥細くし見名考ありし  
 水より先まねの音に相隣り  
 むつ子鳥子出—南宮のふらふら  
 晋子う花摘み至—と外異天、初  
 茄子不玉う巧所—と



室八崎よりて

芭蕉

系孫子に踏ひ何ら煙く如  
 入う時日も系ゆよめ名孫子  
 種つぬ里ハ何をうまれそる  
 入色の種もきこへ春のうれ

高久角たふま標をこころはく  
 一尺の葉門同新二人形標の  
 標りしと鳥を標殺生石  
 三んと鳥標を標にあり  
 以水の先この所也



あつちや高久の宿のやまに  
末の回と歎く短夜の雨  
芭蕉

ありあつちや苗も河の音  
芭蕉

園中の宿と水鶴に同い地

あつちや漸増りしむらさき

あつちや女よ志しん志の子摺

あつちやあつちや市の町も

新庄の流亭まで

水の奥山家あつちや柳

秋鶴亭まで

あつちやもうとさつちやあつちや

小朝の柳あつちや海士りま

あつちやの陰賛

あつちやあつちや

あつちやあつちや



奥品名瀬那相系  
信た坊の亭よそ

以流のろめや奥の田植うこ

為

いちこそおて我まうけ第

第竊

水せさてる祿のろや並似流

曾良

籠<sup>カニカ</sup>上<sup>カニカ</sup>鉢のや生うす也

為

一葉しく月よ蓋あさ川柳

竊

座<sup>カニカ</sup>中<sup>カニカ</sup>祿やむ一村と袂あ

為



魁の女々上総と佛よ茶を返て  
 世を多行しやと涼むなまの  
 何の川餅にも夏の入ぬらん  
 樟の小枝よ恋を度こそ  
 涙てん嬉う留の名もよら  
 高海山や白髪がもくし  
 酒盛ハ軍と送る関よ来て  
 秋とくら才と地らけし候

良 竊 良 竊 良 竊 良 竊

高る如の壁突破る麻の角  
 崎の山伽は位あきら月  
 笑くの祈と糸に新指て  
 う所なき骨を流なく糸抱  
 心奪は屋よ 蝕不見 そくや浩ゆらん  
 芹堀えうり清水流ぬま  
 新川雪車一筋の流ありて  
 かのく武士の冬よ宿宿

良 竊 良 竊 良 竊 良 竊



字よりぬおゆ人の世の世よあはれ  
まよめされし浮名をぬき  
手枕にほそき膝をさし入て  
何中するの事ぬ七夕  
住くる者の相は月とよよ  
為あはれむ六条の路  
切檜枝さきに櫻枝し  
あはれむこの世よ志を  
良 窮 為 良 窮 為 良 窮

さしやほりしをくぬ  
影生ふの下さしゆ  
草遠よるに世初とあはれ  
はのうらむれしゆ  
六十れぬそ人の正月あはれ  
蟬鳴すたよ小袖くぬ  
良 窮 為 良 窮 為 良 窮



七羽新法

此乃よふ編せし〜流れぬ

風流

そ〜先へくちの風の意也

鳥

菊作り 淋よ 蔭と 杉 流て

孤松

芳きもら 流き 虹の 中より

管長

せらふ 菊の 月よ 二里 隔り

柳凡

る 市々 竹を 約む くとん

草

すも けり 又う けり 矢と ぬ 竹人

菊

雪こころ けり 別を 定む

流

板より 三寸も せし 交唐 瓶子

良

蔭を 抑て とと けり

如柳

之 板より 蓋よ 木心 の 品り 連し

木端

流の 音きく 鳴れ 墓い

凡

音 濁し ぬ 松は かの れと けり

柳

秋 踏む ちり 楮の けり

菊



けり月と燈の小秋あり  
秋ありんとあそく也  
散る葉の今い衣とあそく  
陽を消る庭あのみ  
樂いことあそひてあそく  
果あそくあそく月代  
袖音却燈いあそくあそく  
牡丹のあそくあそくあり  
柳 凡 端 流 良 菊

老僧のいつか盡くあそく  
武士みされ入るあそくの門  
たのしみもあそくあそく  
羽織よはくあそくあそく  
秋文てあそくあそくあそく  
うさひすあそくあそく  
葉あそくあそくあそく  
お城の編よあそくあそく  
端 凡 菊 柳 流 端 良 菊



なる供御の者も疎りて  
 よもれてをよき祿直の白紙  
 ありて心のからよの器なり  
 志くする止しぬの波きく  
 鳴く海をたぬ袖交て  
 夢くより 柳 流 良

山形所とて

又月ぬと集て涼一葉  
 雲を流かく岸の船杭 一葉  
 風廻りよふ空子親ちちて 為良  
 雲とむよに葉の細る 川  
 牛の子にんあくまじ夕同き 栄  
 雨雲きく懐れ 為



徳道と枕よきくふおし

松むすひ玉玉の境目

永樂のちぶち顔とておて

夏と合する大響の鼓

蕙の名と噴とかしらる

水石粉く川る双六の石

まき揚る簾よ兎の這入て

好ふ人に告る秋く管

水くゆり井石の月こそ表おれ

花のほむを減する茶むし

涅槃のくまむ山陰の塔

織多村の浮世の外れ書寫て

かこふくうらる甲斐の一紙

津垣人よ厚くぬ園不

おせしむし新ら松以

川

良

高

栄

良

川

栄

高

川

良

栄

川

高

良

川

栄



望むる望みあはるがのかりと  
良

集よ花々の名とさむ月  
良

麻苗に芳ふりかりし雲は池  
栄

葉も実よむて家路志す  
川

移りて咲きあはれと春のうけら  
春

あまえくあはれお日の清  
良

故心の友と記をうりうり  
川

えきふ論する船の系合  
栄

雪みくれば時々の市は名海と  
良

蝶舞の目と州府の客  
良

亡人とあはれ懐帯にうきうき  
栄

やも免物の迷ふ入道  
川

雷はしと相立も越へふ茶の香  
良

山田の鐘といふふ村  
良

えき上川のわたり一葉の  
空よちあはれ  
川

えき二件友 芭蕉の  
桃香  
書



六月十六日  
吉野助亭より

淡路の海より入るる水と川

為

月をゆりて水底の深き

令直

黒鴨の飛り居るの意明て

不玉

林の深きありん雲をたれ

定連

波のちの折る作りて市を初

為良

新に海より青の油火

任曉

不機嫌のふよれもふ衣衣

扇以

直江のぼき

八月や六月のたのむは

為

高と載る 桐の一葉

た栗

船の舟に船をく遊ば分て

為良

世世の小船をたせしる

眠瑞



鳥啼むふよ山とんさりりり

世竹

松の本向より響く徳やう

布袋

夕風庭吹拂ふ石の磨

石雪

響より響く殿の川水

純字

心ひけぬ篋と徳ふまじし

梁

さぬくの坊より起し出る

良

投く小恨のふれ指はきて

義年

鏡よみら我よりい歌

鳥

吹たあれ新雪は月の色落よ

栗

麻川こころ大れ小くさよ

雪

庭のまをええぬ雲衣

珠

まのま二人のふ本の磨

栗

茶の垣まをり響て星うそよ

年

鯨の羽をむ幡鐙の歌

雪

来ぬハ髪刺唄う洞子て

花

音ハ色くよ人くれ文

良



序

旅をこして道の系と仰けたの主  
ありて浮雲は風よこせりまききよふ  
思いのやゆさら抱くまふらに  
田毎れ月と暮るし木曾の瘦も  
二夜の間を靉冥又うし海は身  
衣久ふ千里あふと輝るの足  
つらりし草鞋ふくしれりの言

三冬の半志をこに情をこむ  
きにけりふ年とさう旅なりそや  
る世はあふくの感あるをせうと  
今紫立園は捨遣いの舟のをこ  
ふさうのうぬしてそれの附録  
志しを人の口くをせうぬふ  
西夢を題してさう四時の流り  
心もあふく過客の夢をこあむ



よのつらきあきむすむす  
おとこころに河津の

月意園新

そのまゝと  
記しゆりた

四時口端

柴立園

海青

えりや竹と俵式の村す光  
嵐色に白福川之阿りまを始  
拂ふや一まゝと通りまの雪

寛永末亭上洛の勢預ちなる  
梅の實挿して花んらく咲ける  
よそに物也よとて料幣  
法をうけらまはれハそ々に

梅の茶むすれ付る新端うか



ひとり寝のねそ踏より猫の志  
雪よ眠てたるとちや川と鳴き  
け船より来る船りつる雪隠り風  
恙い時よねいさう似たり月  
池水や文より葉うくの白松  
む川よりな葉や歌比膠つけ  
花をちいさき鳥はうけ合は  
かの川より橋ありく夕アうか

雪うねる雪の端ははしり哉  
女房うねるや交にうね衣久  
恙系してぬの流る 柳明ふ  
錢いと川より却る牡丹は  
川ぬらや虫とこねさぬ鯉賣  
こ日月や葛蒲よけら細基手  
ぬ雪の空たてあやと似機は  
お月あや汐の流来と水の下







題坂月

水比月今夜は猿も手におさる

葉鶴のうら朝流りよと  
しる猿よ

秋草や朝日夕日と縁の奥四

お襟より向ふ中凡のそら鳥

叫の戸にひらるるのみ  
ありその時

盗人し取あつてりぬこむ

と川明な跡しほくぬ怪り物

急心吹講日光膳の白ひかた

浮世のさう所より遠くのすこ  
らけえかたに石とくまを

おのの身と枕よ鴨比うき祢小

さいうま帽のかさちいぬ嵐ふ

傳葉塞に比立さう向ふおぬ

出流つて淋くちなりぬきも者も

龜井戸へぬりり

ぬりり



梅一編朝日と舟む冬至ふ  
誰そ来い大根切てん底の雪  
葦白魚や吹くえーふたひ雪  
ふ家さふ志る杉掃心吹呼き水  
川年よふのこすはくゆふ

四季和合海

霜下指くふ子たうく次を風畫 老嵐所  
灯小舟いあめん後此月  
さうくく新酒は御り山嶽 木爾  
又七所歩けて来るや又衣  
夜の水白さを踏ふ天此川  
あゝの葉も目を突やうに枯なり



ふ梅や書戸もかきさし舞あし 汲泉

ま梅や歯よこころあけ外の音

木は葉さく梅は白ひは書こりり

ころ人も目さうり新地雪の梅

何おもよまき入りと小田の石 新溝

火う消て念仏きこくゆ物舟は

酒のあふ宿尋杯りりよの月

初雪や袖の雪を揮ひよ路

鐘いかりや入相の紐子比声 杉舎

傘とむかひめしるるるるよふ

物意をうつしあはしうて

なぐしや栞てるもあふよ草の市

批灯の真敷さむし雪は上

隈指下の庵まきし一枕の空 左英

川久しそあふ雪はや栞まは

草のよやふあふむす小室の帯

折層うきくしてゆきく物



うーや茶窓の日々〜好日〜てり 葉五

名目や地〜海のるる〜

人と皆水ありてなすふす 雲窓

雪折の杖捨てけは〜

つて折る山の山干やかんこも 孝山

角たてて芭蕉破るふ 銀牛

秋さむく鮎明の身は雨右外

葉をとる次月雪茶の小まけ

竹止りを忘るるあり  
ま〜り〜

恭桂

去る中人の晴れお 小

一とせ陸奥に有る時雪中に居り  
多〜て象ほえて来よ〜  
ては卯月一日よ〜  
海の日や〜

象〜やう〜む〜の衣〜

鴻の三巻めて

ちの妙や才の毛の動くは致坊

管舟にをく〜



数寄人の庭にめぐるや露の露 此園

夕暮らに垢落しりり 蝉の衣

月夜山く訪て

つりくや嵐も照葉の繁葉掛て

と表山よ冬の葉山子に破き笠

二之尺尺の明くる柳 うか 昌川

恙竹よ濡る柳巾ぬれ友

柳ちる風の清氷や冷みこり

月影に枝痛けあり 久し柳

蝶布

おぢやるぬハ常路の雨ふり

玉輪の志けぬ津一白牡丹

明くる手拍子志める 杞りり

路く旅も雪の結末を念仏

梅り香巾笠よ涼よて歳返りり 左伎

文り子子の夜くひたり 小抱石

葉に集て蝶も花はくを暑く 実栗

麻をゆつを花持をやりの月



落桂咲せし枝へ葉をくさる  
あ月るや蒲団をたしぬ紅のき  
ゆはなしに蚊の来て喰ふ夜をひ  
蝶竹の雲より掃し月夜哉  
雪もれ現くや萩の梅のそね  
川結のうらみ月てゆき涼しよ  
雪のぬに隣村つとがさりけ  
翁の角に湯婆をさるるをりか

平舎

好流

苗代やとさふとさふの水乃色  
晴はらぬ空よ舞する田植うな  
八翻や腹一とんの露の玉  
新米の古味あつた茶や初阿豆  
雪もりしと雪を啼て喰ふちる  
三粒ともぬの拾う娘若もふけ  
かのの羽を若よする秋の胡蝶は  
雪の拾う河と夕アもあがり

英二

州也



菊苗や秋に黄みなり白くたり 里夕

菱腰の姿も肌似も菊の花

印袴よちいさな菊の白ひけ

菊枯て隈右の淳子建みり

行陸舟舟吟

さゆ竿も臍也りさ里月夜 来時

子田称念ちりて

茶の泡も法と坊より芥子坊之

羨望の田とささくてや石の声

ちる花は竹のころもささく外

川妻や紐子ハ呼もさけべも 野紙

蕪や柳をささく 菖蒲草

鶯の朝よかむや家志くれ

むつりい世と見限りて落葉は

腰うける窓まで何れで脚踏ふ 鏡考

秋風のうらしやや麻の角

梅の香もさるや月のむきを 床石

初雪にふりね焼そ瓦竈



海系くに何と鐘とそ落の蓋 凡翠

吹下流けえを拍也有る三吹

又月や夜よりと契地雲破り 青秋

風より水よりれり 河系りふ

七種や只とそまの取明とこ 海遊

秋風より楸おけむる西の海

まよとせの川伸とる柳りふ 千里

秋風の川志とるさむの柳り

ある葉や梢より秋雪の富士 杜英

よる月や流より痛さしりの雪

名月や夜とる志らるる田子に南

木がしや鏡の中の不二若雪

何くの葉吹あけてねをる月 魚鱗

三日の月影と踏ふ夕了如ふ

比るよるの柳もちり吹りふの月

陶より水多啼きり秋は月



白鷺の尾ハ継ぐ尾を雪小

轆糸

日晝や霜と唄く雪の樹蓋

樹と雪の雪のころや秋の風

雪結のころや明けの光は雪

文通のまき中

誰人の凱陣より雪の中を歩

蓼太

雪降りちりちりや雪の約々嶽

ころころ雪は林かむむ廿七夕

水巻てりりが柳のそとまき小

蓑人

庭下の雪とやいそむく川雪

葉捲り初ま淋しきみら初

埋火中宵中向ふら水の窓

けりあふと水山あく水難小

頓賀

冬の日にくく高し圍の雪

日比柳や雪と積のうけ初し

魚齋

白鷺中終り月比初ら

時



吹流を系と送らや常陸川 曜る

若竹や角のそねら葉の尖

山月舟返るる藤の葉うか

鈴を綱と添へ夢も吹葉市小

教入み白水流をふふうね 半賦

若舟のいよく音一雨の境

浮舟の櫻ちりしりうき花

山月舟井よさくさるる

葉の系よあしぬや音うたふる盃 園郷

雲をてし照てし光らふすい水

音こめて秋うらなう一鴨の舟

風よまうけて空の入りうか

海に日の落ちてる川と魚の群 新

空歡の本に花よもたて若葉水

相繼もなくて暮の夜うね

誰く掃よ思登心の流葉水外



茶散く梅の老木よりりり 月道  
初秋の目とさぬせとや葉のと  
夕顔の茶にも輝る日影は 晋海  
鶯籠の屋てゆききりり厚味  
梅より白い余情や梨の糸 半紗  
お保川の白も河を少や青月  
初冬の声を碎や波の音  
蔓栴ととらうはくはの冬風は

息吹きも苦い為や解りり 巴文  
吾息と名を呼てさく 思ふか  
雪の脚のちやさと秋の玉よりけ  
を梅も白り梅風の吹はし  
苗代やき浪よする雲の風 月砂  
凌雪も小松よちくぬ 遠とこら  
隠れよよ手柄の名あり 菊名  
志すれもら雪とくくり 也冬柳



茶壺と竹る島のさく風成 木剛

野鴨や茄子に羽のまへる時

葺袴や始に折るおまても

瓢箪に浮世の軽し神如さ

鐘鳴て喚くと破産の桜うさ 寸長

一日のつゆさや燃て花ある

まどろのゆきを屋う原星の雲

初雪やかたき極る庭の松

長閑さの顔うらやゆき守る 園井

朝くの筈も涼し新書

檜守此幸さ徑末や葺の雲

と卯火の雲書やまや冬鏡

一篇も何ごよみ多れ地柳水 雪津

よの間に来て折るまを小田の酒

風や初さ記ええぬ茶茶系



旅宿の印を折りて墨をぬきお進珠に  
向新の心地より返り旅入の孫若者の  
砌を居る清福の由不斜也却  
也坊うはねる更科とんけい海に  
涼月庵より始有ったけい海に  
かへりて節の抽物とけい草の集  
を思はれりて舟のよりてはるとん  
又去る旅便りよ無り月と翁翁白  
赤伝木雪中老師のしるす村伝の文  
印板のうら来旨とけい竹を指ひてト

家をとらるるを思はれりて舟のよりてはるとん  
後つてせとのりりしんてあかきされ  
すうらかりんよのぬて款とト  
あつ集入の五白のを由系は程  
の中後二之句おきりていお念の  
を便有件し船を

夢をちと印

七月十日

あふき 好  
ト



延享 甲子 林鐘

書林 西村源六  
彫工 吉田魚川



